

病虫害発生予報 第2号(5月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所
TEL 0736(64)2300

予報の概要

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	もみ枯細菌病による苗腐敗症 ばか苗病 いもち病 ヒメトビウンカ 縞葉枯病 ツマグロヨコバイ イネミズゾウムシ	並 並並 やや多 やや少 やや少 並	カンキツ	かいよう病 そうか病 黒点病 灰色かび病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアザミウマ	並 やや多 並並 並並並 並
			タマネギ	灰色かび病 べと病	やや多 やや少 やや少 並
キュウリ	べと病 うどんこ病 褐斑病	並 並並 並	モモ	せん孔細菌病 カイガラムシ類	やや多 並
野菜全般	アブラムシ類 ハダニ類 アザミウマ類	やや多 並並 並	果樹全般	カメムシ類	少

気象予報

1か月予報（予報期間 4月22日～5月21日 大阪管区气象台）

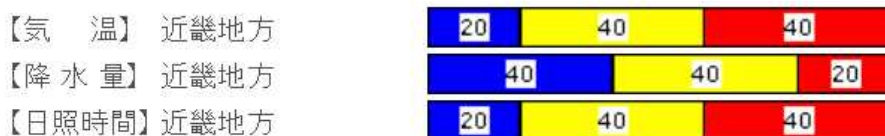
<予想される向こう1か月の天候>

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）>



凡例: 低い(少ない) 平年並 高い(多い)

5月	月平均気温(平年値) (°C)		月降水量 (平年値) (mm)	
	和歌山	19.3	和歌山	150
潮岬	19.1	潮岬	249	

I. 水 稲

1. もみ枯細菌病による苗腐敗症

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 前年の県内全域におけるもみ枯細菌病の本田での発生面積率は11%（平年3%）であった。

② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発病ほ場から採種した種子は使用しない。

② 種子消毒を行う。

2. ばか苗病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 前年の県内全域におけるばか苗病の本田での発生面積率は4%（平年3%）であった。

② 種子消毒に用いる薬剤の効果は安定している。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① もみ枯細菌病による苗腐敗症に準じる。

3. いもち病（苗いもち、葉いもち）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 田植え時に育苗箱施薬剤を施用する。

4. ヒメトビウンカおよび縞葉枯病

(1) 予報内容 ヒメトビウンカ 発生時期 早 発生量 やや多
縞葉枯病 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 4月上旬の休閑田における20回振りすくい取りによる平均生息数は、和歌山市で57.3頭（平年7.3頭）、紀の川市で33.3頭（平年7.7頭）、かつらぎ町で7.3頭（平年4.7頭）であった。

② 越冬世代の50%成虫化時期は、紀の川市で3月16日以前（平年3月23日）であった。

③ 県北部におけるヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、和歌山市3地点の平均4.1%（平年14.4%）、かつらぎ町7.9%（平年13.9%）であった。

④ 県北部の本田における前年のイネ縞葉枯病の発生面積率は4%（平年12%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。

5. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 4月上旬の休閑田における20回振りすくい取りによる平均生息数は、和歌山市で20.3頭（平年33.0頭）、紀の川市で2.0頭（平年19.3頭）、かつらぎ町で9.0頭（平年60.5頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 田植え時に育苗箱施薬剤を施用する。

6. イネミズゾウムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 那智勝浦町での予察灯による4月1～20日の誘殺数は0頭(平成0.4頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 田植え時に育苗箱施薬剤を施用する。
② 5月中旬までに田植えする地域のうち、多発地ではさらに田植え3～4週後に薬剤を処理する。

II. 野 菜

<タマネギ>

1. 灰色かび病(白斑葉枯病)

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での4月中旬の発生ほ場率は5%(平成0.3%)であった。
② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ほ場の排水を良くする。
② 罹病葉や収穫後の残さは速やかに処分する。

2. べと病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での4月中旬の発生ほ場率は5%(平成30%)であった。
② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ほ場の排水を良くする。
② 罹病葉はほ場から持ち出して適切に処分する。

<キュウリ>

1. べと病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での4月中旬の発生ほ場率は33%(過去5年の平均32%)であった。
② 県中部での4月中旬の発生ほ場率は33%(過去8年の平均52%)であった。
③ 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。
② 薬剤防除は予防散布を重点に、薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での4月中旬の発生ほ場率は0%(過去5年の平均0%)であった。

- ② 県中部での4月中旬の発生ほ場率は75%（過去8年の平均60%）であった。
- ③ 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。
 - ② 薬剤防除は予防散布を重点に、薬液が葉裏に十分かかるように行う。
 - ③ 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、他系統の薬剤とローテーション散布する。

3. 褐斑病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部での4月中旬の発生ほ場率は6%（過去5年の平均2%）であった。
 - ② 県中部での4月中旬の発生ほ場率は75%（前年91%）であった。
 - ③ 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。
 - ② 罹病葉や収穫後の残さは速やかに処分する。
 - ③ 病原菌の胞子が資材に付着して伝染するので、支柱等再利用する資材は栽培終了後に消毒する。ネットやマルチ等は更新する。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部のキャベツにおける4月中旬の発生株率は、モモアカアブラムシ18.9%（平成14.8%）、ニセダイコンアブラムシ0.6%（平成1.8%）であった。
 - ② 県中部の施設栽培キュウリにおける4月中旬のワタアブラムシの発生ほ場率は17%（過去3年の平均9%）であった。
 - ③ 県中部の施設およびトンネル栽培スイカにおける4月中旬のワタアブラムシの発生ほ場率は41%（過去2年の平均30%）であった。
 - ④ 黄色水盤（紀の川市）への4月1～20日までの飛来数は、269頭（平成33.7頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部のイチゴにおける4月中旬のナミハダニは発生ほ場率63%（平成33%）、発生葉率25.0%（平成8.9%）、カンザワハダニは発生ほ場率13%（平成35%）、発生葉率0.6%（平成10.7%）であった。
 - ② 県中部の施設およびトンネル栽培スイカにおける4月中旬の発生ほ場率は41%（過去2年の平均66%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① ハダニ類はほ場の周辺から侵入するので、外縁部の株において早期発見に努め、初期防除を行う。
 - ② 同一系統の薬剤を連用しない。

3. アザミウマ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部のイチゴにおける4月中旬のヒラズハナアザミウマは発生ほ場率57%（前年87%）、1花当たり生息密度0.3頭（前年0.7頭）、ミカンキイロアザミウマは発生ほ場率0%（平年：発生ほ場率20%、1花当たりの生息密度0.1頭）であった。

② 県中部の施設栽培キュウリにおける4月中旬のミナミキイロアザミウマは発生ほ場率25%（過去3年の平均43%）、ミカンキイロアザミウマは発生ほ場率0%（過去3年の平均0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 生息密度の低い時期から薬剤防除を行う。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. かいよう病

(1) 予報内容 初発日 5月16～25日（並）

発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における春葉の越冬病斑の発病葉率は2.7%（平年12.7%）であった。

② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 葉害対策を講じた上で銅水和剤の予防散布を行う。

② 罹病枝葉の剪除と防風垣の整備に努める。

2. そうか病

(1) 予報内容 発生時期 並

発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 前年10月中旬のウンシュウミカンにおける果実発病の発生園率は6%（平年2%）であった。

② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 常発園や前年多発園は発芽直後の防除を基本とするが、発芽直後に防除できなかった場合は早急に散布を行う。

② その他の園では満開期に黒点病、灰色かび病を防除する際、そうか病にも登録のある薬剤を用いる。

3. 黒点病

(1) 予報内容 発生量（初期感染） 並

(2) 予報の根拠

① 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹上及び園内外に放置された枯枝を処分する。

4. 灰色かび病（開花期）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 常発園では満開期に防除を行う。
- ② 開花期～落弁期に曇雨天が続くと発生が助長されるので、必要に応じて防除する。

5. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における4月中旬の発生葉率は2%（平年0%）で、マシン油乳剤を散布している慣行防除園における発生葉率も0%（平年0%）であった。
 - ② 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 冬期から春期にかけてマシン油乳剤を散布していない園では、夏用マシン油乳剤200倍の散布を行う。

6. ヤノネカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生時期 第1世代1齢幼虫初発日 5月16～20日（並）
発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における越冬量は平年並であった。
 - ② 予察式によると、第1世代1齢幼虫初発日は5月17日（平年5月17日）と予想される。

7. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除、由良町）における4月中旬の黄色粘着トラップによる越冬成虫の誘殺数は4頭（平年3.4頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① イヌマキやサンゴジュなど防風樹近くでの発生が多くなるので注意する。

<カ キ>

1. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 前年10月の「富有」の発病葉率は11.2%（平年30.4%）であった。
 - ② 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 子のう胞子飛散最盛期は4月下旬～5月上旬であり、この時期に水和硫黄剤を散布する。昨年多発した園では、この時期の防除を徹底する。
 - ② 4～5月に降水量が少なく、乾燥気味に経過すると発病が助長される。
 - ③ 菌は葉裏の気孔から侵入するので、薬剤は葉裏をねらって丁寧に散布する。

2. 円星落葉病

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 前年10月の「富有」における発生園率は35%（平年39%）、発病葉率は0.6%（平年5.1%）であった。
 - ② 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 子のう胞子飛散は、5月上中旬から始まり、5月下旬～7月中旬の降雨後に多い。二次感染はしない。
- ② 薬剤防除は、5月から8月までマンゼブ水和剤、マンネブ水和剤、有機銅水和剤等を定期的に予防散布する。

3. 角斑落葉病

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 前年10月の「富有」における発生園率は77%（平年77%）、発病葉率は8.2%（平年17.4%）であった。
 - ② 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 分生子による感染は5月上中旬から始まり、7月中下旬まで続く。二次感染を繰り返す。
 - ② 薬剤防除は、円星落葉病に準ずる。

4. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における4月1日～15日の黄色粘着トラップによる誘殺数は4頭（平年4.0頭）であった。
 - ② 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 落弁期を中心に防除する。
 - ② イヌマキやサンゴジュなど防風樹の近くで発生が多いので注意する。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の4月中旬の発病葉の発生園率は20%（平年12%）、発病枝率は0%（平年0.3%）、発病葉率は0.3%（平年0.3%）であった。
 - ② 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 春型越冬病斑形成枝は葉への伝染源となるので剪除する。
 - ② 果実発病は、5月以降の降雨により多くなるので、降雨直前の予防散布を徹底する。予防散布ができなかった場合、降雨後できるだけ早く薬剤散布を行う。
 - ③ 本病の防除薬剤のうち、マイコシールドは連用すると葉先の黄化を生じることがあるので注意する。

2. カイガラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の4月中旬のウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ雌成虫寄生枝の発生園率は30%（平年33%）、寄生枝率は、2.4%（平年2.3%）であった。
 - ② 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 樹体生育期における防除適期は、第1世代のふ化幼虫発生時期であるため、ふ化幼虫発生盛期の少し前に薬剤散布を実施する。

- ② 近年の県北部のふ化幼虫発生盛期は、ウメシロカイガラムシが5月1日～5日、クワシロカイガラムシが5月中旬頃である。

<果樹全般>

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

- ① 県内47地点のチャバネアオカメムシ越冬成虫の捕獲頭数は、落葉50リットル当たり0頭（前年0.3頭、平年0.5頭）、捕獲地点率は0%（前年19.1%、平年20.0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きいので、園内での発生及び被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ② ウメ・モモなどでは、収穫前に越冬成虫の飛来が確認された場合は速やかに薬剤による防除を実施する。
- ③ ウメの被害は品種間差が大きい。小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。
- ④ カンキツでは蕾、花が加害されるので、被害状況を観察して防除する。
- ⑤ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所コーナーの果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所コーナー>

[http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/
boujyosyo-yosatsujyouhou.html](http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html)

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。